



「大学の「機能分化」状況における専門教育と教養教育との創造的再構成」プロジェクト

インタビューシリーズ第3回：理学部 野口哲子先生

昨年度まで教育・学生支援担当の副学長を務められた野口先生。ご専門は生物学（細胞学）です。奈良女生え抜きでいらっしゃる先生は、大切に保存しておられたご自分の学生時代のノートを机上に揃えてインタビューに臨んでくださいました。



■ 専門教育志向だった学生時代

「私が理学部1回生の時には、専門の講義は一つもありませんでした。友人たちと「せっかく生物を勉強したいと大学にきたのに！気が抜けてしまう」と話した記憶があります。代わりに、植物学専攻の「ピヌス」という植物採集をする会には積極的に参加し、世話役の3回生と親しくなれましたね。（机上に教養科目のノートを並べて）生物学のノートはたくさん残っているのですが、教養科目は3冊。力が入ったノートなので、残っていたようです。倫理学のノートはお見せできると思うんですけど。」

「1回生の英語では、『デージー・ミラー』と『ブラック・キャット』を読みました。先生は作品の鑑賞を狙ったのかもしれませんが、理学部の学生がなんでこれを読むのかなと…。ドイツ語は非常勤講師の女性の先生で、必修。前期は文法、後期は天体に関する文章を講読しながら、文法も学べる教科書だったと思います。ドイツ語は2回生でも選択し、3回生後期にも専門の生物学演習で学びました。卒業研究を始めて、一番関係する論文がドイツ語でしたが、なんとかできました。」

「私には印象に残っている教養科目がないのですが、大学同期の食物栄養の塚本幾代先生は教養の地学が素晴らしかったと絶賛していました。教養科目がおもしろいかは人によるのですよ。私は大学から軟式庭球部に入ったので、1回生の時には体力ができていなくて、勉強は少し手薄。でも、4年間テニス部で身に付けた体力と気力が、4回生以後の研究生活にすごく役立ったと思います。」

■ 教養教育以前に身につけるべきことがある

「勿論、大学の理想は自分で学ぶこと。でも、今はスタディスキルから教えないと駄目なようです。教育関係の副学長の集りに参加し、どこの大学も同じ問題を抱えていることが判りました。他大学の話を聞くと、奈良女生は

総じて真面目です。去年、ノーベル化学賞を受賞したアダ・ヨナット博士の講演会を開催した時、英語で土曜午前、学生が集まるか心配しましたが、記念館がいっぱいになりました。学外の人もいましたけど。博士は女子大学での講演に配慮され、女子学生を大変エンカレッジしてくださいました。翌日大阪で開催された高校生対象の集会では、同時通訳のせいか寝ている生徒が多く、博士は途中から不機嫌になって、講演後もどんどん言葉が少なくなったそうです。こんな話を聞くと、奈良女生はいいなと思います。ただ、少人数ですが以前では考えられなかった相当態度の悪い学生もいる。全学共通の授業見学で驚いたのは、多くの参観教員がいるのに、遅刻しながら堂々と入室、机に突っ伏して寝ていたり。私自身、居眠りは生理現象だから仕方ない、他の受講生の邪魔にはならなし、と注意せずにきましたが、就職活動で苦戦し続け、あせっている学生を見ると考えてしまいます。教養以前にマナーも教えた方が社会に出しやすいのではと。現在の厳しい大卒就職状況が繰り返し報道され、高校生の大学選びでも卒業後の就職状況を大いに気にするそうです。学生のためにも、大学のためにも、『奈良女の品格』、つくりたいですね。」

■ 学士とは論理的に考えることができる人

——今の学生を見ていて、専門の生物学も教養も含め、大学で学ぶことの意味を彼女たちはどのように感じていると思われますか。

「3回生までは、知識を習得して単位を取ること。学生としては当然ですね。卒業研究を始めて、それまできっちり考えていなかったことを自覚するようです。例えば、英語科学論文を読む場合、学生はまじめなので全訳をノートに書いてきます。が、単に訳しているだけなので、「これはどういうことをいっているの」と質問すると答えられない。こんな調子で、マンツーマンで1、2論文こなすと、学生は考えて読めるようになります。結構時間がかかりますが、教育効果絶大なので、毎年しています。」

そして、卒業研究をまとめる頃になって、「大学では知識を詰め込むだけでなく、論理的に考える」の真意をもう少し判ってくれるようです。特に卒論作成で、自分で苦労して書いた文章の矛盾を指摘された時、何かを掴んでくれるようです。」

——世に送り出すとき、学生たちに論理的に考える能力さえあれば、そんなに恥ずかしくないだろうというお考えですか。

「学部卒ではそうですね。もっと期待したところですが、まずは卒業するまでに、論理的に考えられるようになってくれたらと思います。今は情報が多すぎるので、単に暗記したことは、どんどん忘れてしまう。覚えるのではなく、論理的に理解した知識なら、量的には少なくとも、それが核になって知識を広げられると思うのです。学部で、一つのことを完結できれば、どの分野に進んでもその応用でやっていけると考えています。生物学の専門職なら、大学院に進学して更に深く学んでほしいです。」

■ 教養教育は何を目指すのか

——基礎的なスキルを大学で教える場合のやり方には二通りあると思います。学部等に関係なく基礎的なスキルとして新入生全員にやりましょうというのが一つ。もう一つは専門に則して、たとえば生物学に則して、生物学の勉強をしながら、そのプロセスで必要なことをやっていくというやり方。先生はどちらがいいと思われませんか。

「生物1回生の基礎細胞生物学を20年以上担当し、細胞学の基礎と同時に大学での勉強法も叩き込みたいと思ってきました。1回生前期で必修科目。学生たちはまじめですよ。でも最近、レポート課題を出しても、最小限のことしか書いていないのです。学生が時間をかけて自主的に調べることを期待しているのに、レポートの書き方を知らない？教養以前の問題じゃないかな…。それで、初年次教育を兼ねた実学的な教養、スタディスキルは大教室での教養教育より、各学生の能力を把握しやすい少人数の専門教育から始めた方が有効だ、と思い始めています。文学部では、初年次教育で文章の書き方を教えているそうですが、全学共通科目のレポートを見た時、成果を感じましたね。去年、「大学生活入門」を開講しました。これはスタディスキルではなくスチューデントスキルの養成ですが、このような科目は全学でよいと思います。」

——1回生からきちっと専門教育をすれば、それが同時に教養教育にもなるということでしょうか。

「生物学の教養ですら教え足りないという感じです。生物科学科では、分子から個体集団まで、生物学を総括的に講義するカリキュラムになっています。生命科学を看板に掲げ、分子・細胞生物学、化学、物理学などを重点

的に教えている大学もありますが、本学では多様な生物、生物と環境との関わりなど広い視野から生命科学を理解してほしいと考えています。マクロの生態学で重要な分類でも、今は遺伝子解析技法が必須で、分子生物学の知識は欠かせません。キャップ制度がある状況で、広く浅くにならないよう苦労しています。私の担当でいえば、細胞学研究の歴史も話せたら、もっと面白い講義になると思っています。」

「学生には多様な考え方に接してほしい。ですから、全学共通科目で他学部の教員の講義を受けることは大切です。その場合、最も関心のある専門教育で大学での勉強法を少し身に付け、それから、広い教養教育を受ける方が望ましいと思います。奈良女では、既にそのような学部教育の体系になっていますが、実情は、卒業必要単位を早くとって安心したい学生が大部分ですね。」

■ どういう学生を世に送り出したか、そのための大学とは

「大学の理念の一番に、男女共同参画社会をリードする人材の育成を掲げているのですから、社会で活躍できる学生です。少し具体的にいえば、論理的に、そして物事を前向きに考えられる学生かな。ここ数年、生物科学科の学生を見てみると、明らかに二極化が進んでいます。単に学業成績だけでなく、コミュニケーション能力、モチベーション、その他。トップクラスの学生はリーダー候補の潜在能力を充分持っています。下の半数でも、小人数とかマンツーマンで丁寧に指導すると手応えあります。特に1回生は。それから「奈良女が第一志望ではなかった」といつまでも引きずっている学生への対策。そんな気持ちのまま4年間過ごしてしまったら、もったいないですから。そういう意味では、初年次教育の大切さを感じます。本学として、リーダー育成と落ちこぼれをつくらぬ教育をどのように進めるか？真剣に考える時期ではないでしょうか。」

「内閣府から「2020年までにあらゆる分野で女性リーダーを30%に」という数値目標が出ています。東大では、「現在20%以下の女子学生比率を2020年までに30%」を掲げて「女子高校生のための東京大学説明会」も開催しています。九大でも理学部数学科入試で女子枠を一度は公表しました。つぶれましたが。このような社会情勢で、国立女子大学の責任はとても重いのですが…。社会情勢を追い風に前向き思考で、少しでも責任を果たしていきたいです。」

——国立女子大としての責任と戦略については、このプロジェクトの中でも引き続き議論していきたいと思っています。どうもありがとうございました。

(2011年6月23日 インタビュアー：甲斐・西村)

インタビューシリーズ第4回：文学部 内田忠賢先生

内田先生のご専門は、人文地理学、日本民俗学、大衆文化論。12年間勤めたお茶の水女子大から奈良女子大に赴任されて5年。文学部社会情報学コースを経て、現在は新設の文化メディア学コースを担当していらっしゃいます。お茶大では、学長補佐等を務められ、奈良女では、今年度は教育計画室で教養教育部会長を務めておられます。



■ お茶大との比較を通して感じていること

——先生はお茶大から赴任していらっしゃいましたが、お茶大の学生と比較して、奈良女の学生の印象はいかがですか。

「お茶大より、奈良女の学生の方が素直ですよ。先生が言ったら、学生は素直に聞いてくれます。お茶大の時だったら、僕がしゃべりながら、自分でおかしいと思っていると、学生の方から「論理的におかしいじゃないですか」と言ってきましたが、奈良女では教師の上げ足を取らずに、みんな真面目にノートを取っていますね。学風の違いがあるのかもしれませんが…」

——授業での違いは感じますか。

「お茶大は全学一本の科目案内だったので、他学部の専門の授業をも積極的に取りに行く学生が多かったです。それと比べると、奈良女では他学部や他学科の学生が入り込んでいる授業が少ない、という印象があります。私が奈良女に来てから、生活環境学部生活文化学科の先生に頼んで、そのシラバスをお借りし、社会学関連の箇所をコピーして、ガイダンスの時に学生に配ったのですが、学生は最初、ほとんど行かなかったですね。」

■ 京大時代の教養科目を振り返って

「私が学生の頃の京大では、学生は自分の専門以外の研究室に出入りする雰囲気があったと思います。京大の教養科目は個性があって面白かったですね。私は文学部の地理学専攻に進学しましたが、教養時代に地理以外の研究室に出入りしていて、それが肥やしになっているような気がします。よく出入りしていた先生は、文化人類学の米山俊直先生。そして日本史の上田正昭先生。あとは経済学がご専門なんだけど、環境問題をやっていた高橋正立先生とか、東洋史の堀川哲男先生。教養以外には、学部の頃から人文科学研究所にも出入りしていました。」

——昔の京大の教養部は個性的な先生が多かったですよね。それぞれにディープな世界があって、よかった印象が残っています。

「確かに概説、概論と称していながら、個性で勝負。誰も概説なんかしない。ただ教養科目って、大事なような気がしています。理系が大きいと、教養科目、教養教育が大事だというのはなかなか理解してもらえないですよ。

お茶大は文系の教員が多かったから、教養重視の雰囲気が強かったです。その点が奈良女とは大きく違うところですよ。」

■ 文系と理系の教育観の違い

「お茶大の時の持論で、文系の先生方には同意する人が多かったんですが、研究者養成をそんなに強調しなくてもいいんじゃないかと。ホンネの部分では、優秀な学生がいたら、東大に送って育ててもらって役割分担をするのがいいんじゃないかという人が多くて。奈良女でも、優秀な学生がいたら、京大に送り込んでいいんじゃないか、という気はするんですけどもね。ただ、そういうふうに関き直れるかどうか。行くかどうかは別にして、がんばって研究を続けるなら、京大に行くルートがあるんだよ、それをウリにしてもいいんじゃないか、とも思うのですが、理系の先生方は、育てた学生をドクターまで行かせて、奈良女の中だけで花を開かせることを目指していらっしゃる。」

——文学部は学問自体、リベラルアーツ的なところがあるので、そこから専門家として育つことができますね。

「ええ。理系のように、この実験をしたら次にこの実験をして、という積み重ねが文系は少ないですから、たとえば教育学系の方は教育学のこまかい知識を知っているより、いろんなことを学んでいて、卒業研究に臨んでくれたほうが伸びますよね。でも、奈良女の学生はまじめだから、狭いところで学びたがるというか…。特に、非常勤枠が減ってしまったから、自動的に選択範囲が狭まってしまいました。」

■ 教養課程のあり方について

——教養科目が次にどうつながっていくのか、という教養課程の見せ方の工夫が必要になってくるように思います。たとえば、自分の大学時代を振り返ると、その科目を取らなくても、学問世界の見取り図のようなものが、カリキュラムで見えたということがありました。

「自分達が受けた時代の教育では、先生方も見せ方なんて考えてないから、学生は関心の向くまま取ったという感じでしたけど、今は見せ方が求められる時代ですね。ただ、履修モデルを頑張って作った割には、学生にとっ

てどれだけ役に立っているのか…。」

「関東の国立大学で勤めてみて、関西よりも学部間の壁が低いと感じました。各学部の自治、権限がすごく小さいから、全学共通の教養科目が立てやすいと思います。それは独法化以前から、文科省に近かったこともあり、結局のところ、上から指示がおりたら決まるわけですし。東大の人に聞いてみても、同様だそうです。受験業界の人に話を聞いてみたことがあります。東大の場合、教養学部を中心に全学的にシステムティックに学生を育てていく。一方、京大の場合、各学部が独自に学生を育てて、よその学部と歩調を合わせることはまったくありません。ところが今は親が自由放任ではなく、管理して育ててもらうことを望んでいます。ですので、教養科目の充実は理想的にはいいんだけど、受験生的にはもっと管理してほしいというニーズがあるのも確かです。私たちの多くは管理したくない、という思いはあるのですから、難しいところですね。」

■ 新たな教養科目の構築へ

「三つの学部の先生方のうち近い専門分野の方がいたら、合同で担当する科目があってもいいと思います。私の専門は地理ですけど、地理は文系から理系まであって、他方、情報科学科の林田佐智子先生は地球科学、地学です。地球の環境問題で、地球規模のデータをどう扱うのかを研究しています。ですので、こうした専門をもつ先生は地理にもつながるから、地球環境問題で教養科目を立てられますよね。また、住環境の中山徹先生は建築の人だけど、ご専門のひとつはまちづくり、まちおこしなので、社会学の理系版みたいな感じです。でも、お茶大の時より強く思うのは、学部間の壁が高いから、長年文学部に勤めている先生に聞いても、理学部や生活環境学部の先生をほとんど知らないという人もいらっしゃいます。こんな小さな大学なのに。」

——それは意外に奈良女では普通状況かもしれませんね。

「そうですね。でもよく見ると、他学部に近い分野の人がいます。だから一般教養科目群という新しい括りができる。他学部の授業を、学生が取りに行きやすくなる。完全な理系に、文系の間がどう食い込んでいくのかは

分からないですけど、地学の先生と、文学部の地理の人だったら組めます。他にもたとえば、生活文化学科の鈴木則子先生の専門は近世史ですが、文学部には近世の先生がいないから、組めるのかなど。また数学科に、数学史を語れる人がいて、文学部の学生が聞けたら楽しいですよ。でも実際は、学生も含めてまったく学部間の交流がなく、もったいないと思います。」

「また、別の科目の立て方として、もし一般教養科目の非常勤枠がゼロになった時、一人で二足、三足のわらじを履いている先生の活用も必要です。ただ、そういう人を見つけるのが難しい。同時に、二足、三足のわらじを履けそうな人に対する負担増をどうするかもよく考えないと。さらにいえば、一つ二つの科目は思い浮かぶけど、バランスよく科目を並べようとすると、なかなか難しいかもしれません。ともかく学部、学科を越えた交流が肝要かと。」

■ 学生への一言

——学生を4年後に送り出すわけですが、先生のご専門に興味がある学生たちに、どのような専門性を持たせて送り出してあげたいですか。

「自分の専門は取材系なので、今のところ考えているのは、取材して書いて、まとめてプレゼンするトレーニングをできるだけさせたいと思っています。」

「文学部の学生だから、マスコミ志望がそこそこいるかと思って、業界に勤める学生時代の知り合いを連れてきて、自主的にマスコミ講座をまめに開いてみたのですが、蓋を開けてみたらマスコミ志望者はいなくてガッカリしたこともありました。奈良女の学生は堅実に公務員がいいと言いますね。それは人生のいい選択なんだけど、もっと不思議な人生を送ってくれる学生はいないかな、という気はしますよね。」

■ これからの奈良女に対して

「三つの学部をうまくつなげて、少ない教員数の大学を10倍とは言わないけど、数倍の教員がいる大学のように振る舞えるといいと思う。優秀な先生方が多くいらっしゃるから、できると思います。小さな大学を大きく使う。学生数は少ないから、お金がなくても、二足、三足のわらじを履いている先生方の専門性を生かすことができたなら、バリエーションが出てくるのではないのでしょうか。それと、教員として母校出身者を大切にすべきではないのでしょうか。理学部にも少ないけど、文学部にも少ない。だから、教授陣に母校愛に燃える学部卒業生を確保しないといけないと思います。」

(2011年6月15日 インタビューア：藤井・保田・西村)

■ 奈良女子大学教育システム研究開発センターニュースレター 17 ■

2011年10月21日発行

奈良女子大学教育システム研究開発センター

住所：〒630-8506 奈良市北魚屋東町

奈良女子大学コラボレーションセンター 204

TEL. : 0742-20-3352

Website : <http://www.nara-wu.ac.jp/crades/>